

ABIC 国際社会貢献センター

Information Letter

No. 47 2016年11月

政府機関関連への協力	アフリカ ザンビア投資促進アドバイザーとして…………… 2
	還暦過ぎてインドを満喫…………… 3
	サウジアラビア大使館商務部勤務の2年間…………… 4
プロジェクトの受託	在日ブラジル人の子どもの教育と将来を考えるセミナー ～カエルプロジェクト日本～…………… 5
教育	中国、何でも見てやろう、中国、何でも食べてやろう…………… 6
	福岡大学夏季集中講義…………… 7
	高校生国際交流の集い…………… 8
留学生支援	東京国際交流館での活動…………… 10
	兵庫国際交流会館での活動…………… 11
事務局だより	ABIC会員懇親会を開催…………… 9
	会員の種類…………… 12
	法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数…………… 12
	賛助会員入会のお祝い…………… 12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル23階
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5970
e-mail : mail@abic.or.jp

(関西デスク) 〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24
住友生命本町第2ビル9階
Tel & Fax : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

政府機関関連への協力

アフリカ ザンビア投資促進アドバイザーとして

ザンビア投資促進アドバイザー **小西 悟** (元 三菱商事)

2015年7月よりJICA投資促進アドバイザーとして南部アフリカのザンビアに派遣されている。

ABICに紹介いただいたJETRO関連のコンサルタント業務にてタンザニアに出張中の2015年2月に、コーエイ総合研究所がザンビアの専門家を募集しているとABIC経由で連絡を受けた。同募集の締め切りは2月23日、そして2月27日の面接当日に南アフリカ経由で羽田に到着し、その足で面接試験を受け、幸いにも合格、同社と共に上記業務を受注した。

私は1972年三菱商事に入社、2013年4月末に退職と42年間の商社生活であったが、そのうちアフリカ南部の小国ザンビアに1988年より5年間、そして念願のヨハネスブルクに1999年より異例に長期な14年間駐在。その結果、アフリカ合計19年間の駐在生活を満喫できた。

アフリカとの取っ掛かりは1988年ザンビアにある三菱商事の子会社である丸ノ内自動車への出向であった。従業員120人ほどの三菱自動車の正規輸入代理店の副社長として現地の社長の下でこれまた精神的にタフな5年間を過ごした。

その後現地生活・取引慣習等にも慣れライバル三井物産と競合しつつトラック・バスは三菱自動車製、乗用車はトヨタ製（三井物産取り扱い）とザンビア政府による車のStandardizationに成功することができた。この影響も大きく、2015年にザンビア入りした際、依然三菱自動車製トラック・バスが圧倒的存在感を持っている光景を目の当たりにし、何ともいえぬ感情が込み上げてきた。

ザンビアでは産業省傘下の開発庁に配属されている。同庁では海外、特に日本よりの投資促進支援の目的にて現地職員2人のCounter Parts（以下C/P）とコンビを組み、on the job trainingを通じた能力向上・投資促進支援を行っ



ザンビアより隣国コンゴへ出張時の配属先のザンビア政府開発庁輸出課長と

ている。

2016年2月にはC/P2人と共に南アフリカ在日系企業を訪問し、ザンビアの長年の政治的安定性および治安の良さをアピールしつつ、銅依存経済よりの脱却を目指し、ザンビアへの進出・投資を実地に働き掛けてきた。従来あえて申し上げれば「待つ」姿勢であったザンビア開発庁が対応を変え「積極的に取りに行く・働き掛ける」重要性を身をもって習得し始めてきたのではと、若干ながらこれまでの成果を感じている。しかしながら日本よりはるか遠隔地のザンビアを知ってもらい、まずは取引を始めていただけるようC/Pの尻をたたきつつ奮闘している実態である。

現地の慣習では、いわゆる「ザンビア時間」に大変苦労している。約束した時間に平気で30分以上も遅れるし、突然のキャンセルも日常茶飯事的に起こっている。政府職員、特に高官になれば「偉くなった証し」的に30分以上の遅れである。最近も日系企業関連での開所式で主賓の大臣が30分遅れとなったが、これなどは「まだ良い方」と現地在住者はコメントしている。



ザンビアの首都ルサカにて初の日本レストラン Nippon Sushimaiのopening ceremony風景 (中央が前在ザンビア 小井沼日本大使、右端が筆者)



アフリカ最大の人造湖Kariba湖

アフリカ駐在生活19年の総仕上げ、かつ最後のご奉公として第2の故郷ザンビアで日本よりの投資Advisorとして引き続き携わっていきたく、アフリカにご興味のある方・企業等があればぜひご一報いただければ幸甚である。

政府機関関連への協力

還暦過ぎてインドを満喫

国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）インド代表 **にしかわ ゆうじ 西川 裕治**（元 双日）

元商社マンの血が騒ぐ海外単身赴任

私は2007-10年に双日から日本貿易会に出向し、『日本貿易会月報』編集長としてABIC会員の皆さまにも寄稿をお願いしていた。それが今回、逆に寄稿する立場となり、時の流れを感じている。

私は現役中にABIC会員になり、語学ボランティアを経験した。2012年に双日を卒業し、続く2年半は日本在外企業協会（日外協）で『月刊グローバル経営』編集長として充実した毎日を送っていた。ただ唯一の不満は、海外での活躍機会がないことだった。

責任重大な名鏡さんの一言

2014年6月下旬、ABICの人材募集メールがふと目に留まった。「JSTインド事務所開設」の人材募集であり、なぜか妙に気になった。そこで、日本貿易会出向時代に席を並べたABICの名鏡さんに、「日外協を卒業したら、また海外に行きたいのでよろしく」とメールしたところ、「予行演習のつもりで受けてみたら」との軽いノリ。その一言が、とうに還暦を過ぎた私の運命を変えてしまった。

8月初めに軽い気持ちで面接を受けたところ、工学部卒（理系）の学歴と商社マンの海外経験を相場以上に高く評価され、即採用が決まって大慌て。当然、後任の編集長は急には見つからず、私の前任者にカムバックを頼むウルトラCでめでたく円満退職。同年10月にJSTに転職した。

転職後からすぐにインドに何度も足を運び、事務所設立許可申請やオフィス、住宅、従業員探しに奔走。そして2015年12月に正式に事務所を無事開設した。

インドで展開するJST事業

現在の業務は大きく3つある。1) インド研究者とのネットワーク構築。世界で一番入学するのが困難といわれるインド工科大学（IIT）など、全国のトップ大学、研究機関を片っ端から訪問し名刺交換することから始まる。2) 若手理系人材の交流促進。「さくらサイエンスプラン」（SSP）

というプログラムで、2016年度は500人の優秀なインド人（15-40歳）を日本に1-3週間招聘する。当然、JSTだけでは引き受けられない。アジア35カ国から4,500人も招聘するからだ。そこで日本の大学、

研究機関、企業などにも受け手になってもらい、費用をJSTが負担する。いずれ世界で活躍する優秀なインド人とSSPで知り合うことができるので、受け手側にとっても貴重な機会と確信している。3) 両国研究者による共同研究の推進。インド科学技術省と協議して研究分野を設定し両国で公募を実施。採択された日本側の研究者にJSTが研究費を提供する。現在、インドが得意とするICT（Internet Communication Technology）分野で共同研究を立ち上げ中で、国際共同研究拠点（ハブ）の設立を目指している。

やりがいのある多忙な日々

インドの税法、会社法、労務規則などは複雑怪奇で頻繁に変わる。さらに、外国人への税金（個人・法人税等）徴収は徹底しており、前納が前提で少しでも滞納すると延滞金利が課される。収益事業をしないリエゾンオフィスでも、決算報告、会計監査の義務がある。当事務所は私と現地人職員1名の小さなものだが、煩雑な管理業務や頻繁な出張もあり、自称猛烈商社マンだった20代の頃よりも勤務時間は長い（実は、単に能率と集中力が落ちたのだろうか）。

ただ、この歳でも現場最前線で伸び伸びと仕事ができる充実感は何物にも替え難く、ABICに足を向けては眠れない。



デリー大学 Vice Chancellor訪問



インド科学技術省（DST）によるSSP壮行会の様子（前列右から2人目が筆者）



全国発明研究コンテストで科学技術大臣から表彰される優秀者（彼らがSSPで日本に招聘される）

政府機関関連への協力

サウジアラビア大使館商務部勤務の2年間

みかみ ひろみ
三神 博美 (元キッコーマン)

2014年4月から2016年6月まで2年3ヵ月、在日サウジアラビア王国大使館商務部に勤務した。ABICからサウジアラビア大使館商務部の紹介があったのは2013年6月ごろであったろうか。ABICからの講演案内や業務紹介メールの中に、サウジアラビア産デーツ（なつめやし）や紅海の養殖エビなどを日本の食品業界に紹介する販売促進の仕事といった募集要項があり応募した。アラビア語の堪能な人や中東に駐在経験のある人たちが応募されたそうだが、サウジアラビアどころか中東地域には一歩も足を踏み入れたこともなく、アラビア語も解さない自分がサウジアラビア大使館商務部に採用されたのはいかにも不思議だった。

仕事を始めて1ヵ月余り過ぎた頃、私が採用された理由を商務官の秘書に聞いたところ、答えは1) デーツの市場調査資料の事前準備、2) 販促方法の提案、3) 調査経験があるといった理由だった。面接の事前準備は大切と実感した。

商務官からサウジアラビア経済に関するチャートのアップデートを依頼された時のこと、プレゼンチャートの最初のページはサウジアラビアの地図で、アラビア半島全景の衛星写真が貼られていた。日本ではサウジアラビアと北のヨルダン、イラク、南のイエメン、オマーンと国境線が直線で引かれた地図を見慣れているので、日本国外務省サイトにあるサウジアラビアの地図を使用した方がよいのではと話した。これに対して商務官からは、イエメンとの国境線ははまだ解決しておらず、北の国々との国境線もサウジアラビアの考えとは隔たりがあるので、引き続き衛星写真を使用した方がよいとの話であった。

100年前の1916年5月、第1次世界大戦連合国のイギリス、フランス、ロシアがオスマントルコの領土を分割し

トルコの勢力を削ぐための密約、サイクス・ピコ協定で設定された直線の多い国境線の結果が、今の中東情勢にも影響しているようだ。

在職2年目の2015年は、サウジアラビアと日本の国交関係樹立60周年記念行事が両国で催された。サウジアラビアからは王族などVIPが来日し出迎えと見送りに、またサウジアラビア関連のセミナーが複数のホテルで開催され商務官は大忙しだった。大使館外務部と文化部は、サウジアラビア文化や経済等の展示紹介やサウジアラビア人ダンサーによる剣の舞をアレンジした。商務部も会場前に42インチテレビを2台両面に設置したブースを設け、今日のサウジアラビア紹介の映像を流した。この映像にはアラビア語と日本語の字幕が用意されたが、日本語字幕の準備にも携わった。

在勤中、サウジアラビア王国の建国記念日（9月23日）のパーティーに出席する機会が2回あった。国内省庁や在日公館から貴賓を招き、サウジアラビアと関係の深い各界の方々やサウジアラビア人留学生などの出席を得て都内ホテルで和やかに挙行された。パーティーではハラルにのっとった豪華な食事が供せられた。イスラム圏では当然のことだが、アルコール抜きパーティーは初めての経験であった。

大使館はサウジアラビア人の他に国内採用のスーダン人、パキスタン人、インドネシア人、フィリピン人と50人弱ながら出身国は色とりどりの感があった。大使館商務部とは、単年度契約ながら毎年ベースアップをいただいたのは業務内容を評価いただいたものとわれながら満足している。



建国記念日パーティーで公式衣姿の商務官と筆者



商務官の執務室で商務官と筆者

プロジェクトの受託

在日ブラジル人の子どもの教育と将来を考えるセミナー ～カエルプロジェクト日本～

もり かずしげ
森 和重 (中南米担当コーディネーター、元 三井物産)

2005年から三井物産の在日ブラジル人子どもへの支援活動(①在日ブラジル人学校への機材・教材支援、奨学金供与、②副教材開発支援、③子どもへの支援活動をするNPO・ボランティア団体への協力)に関する業務委託を受け、現在も継続している。今回は、その中で2009年から実施している通称「カエルプロジェクト日本」について紹介したい。

「カエルプロジェクト」は、日本からブラジルに帰国した日系ブラジル人の子どもの急激な環境の変化やポルトガル語の能力不足、日本での学習の遅れから、心理面の悩みを抱えて不登校・不就学になるケースが増えたため、1990年代後半からサンパウロで中川郷子博士(臨床心理)が中心となり、専門家(臨床心理、遊戯・教育心理など)がサンパウロ市政府の協力を得て行っている心理相談、社会順応支援、教育指導、就学支援活動を指している。2008年にブラジル三井物産が社会貢献基金を設置したが、その最初の助成を「カエルプロジェクト」に対して行っている。

1990年に日本の入管法改正以降、多数の日系ブラジル人がデカセギのため来日し、家族を含め2003年には27万人、2008年には32万人に達した。2008年のリーマン・ショックで急きょ多数のブラジル人が帰国したが、子どもたちが準備不足のまま帰国し、さらに多くの不登校・不就学になる事例が出たために、中川先生から三井物産に対策について相談があった。その結果、帰国前に保護者や就学支援関係者にブラジル側の事情や事前準備の手続き、子どもへの心の準備対策などについて説明する機会を設けることになった。2009年から毎年10月の約1ヵ月間、中川先生に来日してもらい、十数ヵ所のブラジル人集住都市で「カエルセミナー日本」を開催している。

当初のセミナーは、ブラジルでの入学手続き、帰国前に

行うべき子どもへの事前説明などに関する事項であった。さらに、2011年3・11の東日本大震災で再度帰国者が増加し、約17万に減少した残留者はほとんど永住希望者だった。しかし、依然として多数の子どもが日本語能力の不足により、不登校・不就学や将来の進路に悩んでいるため、3年前からは「子どもの教育と将来を考えるセミナー」に切り替えている。

このような問題の起こる背景には、移住者受け入れ国としての日本に「外国人の子どもに日本語を教えるインテンシブなシステム」ができていないこと、同時に外国人(ブラジル人)の保護者による家庭内での幼児教育がほとんど行われていないことがある。現在、多くの保護者は、外国人への教育環境の整っていない二十数年前に来日し、十分な教育を受ける機会がないまま(ダブル・リミテッド)育った子どもが親になっており、子どもの教育方法をほとんど知らないといえる。従って、セミナーは保護者を中心に、保育園・小中学校の外国人指導担当の先生方や関係者に行っている。内容は、1) 13歳ごろまでに第1言語(母語)の確立、2) 家庭内での子どもの教育の重要性(ゲーム遊び・読み聞かせなど)などをポルトガル語で行い、3年前からは、親子によるワークショップ(手芸や玩具作り)を行っている。開催地域・回数は、2014年には10ヵ所・17回、2015年は11ヵ所・17回、2016年は11ヵ所・12回などである。

少子高齢化の進む中で、今後多国籍化する定住外国人の増加は間違いない。20年先には日本社会に参入することを見込んだ外国人の子どもへの教育投資、すなわち心身ともに健全な社会人として育てるか、それを怠ることによる日本の社会負担となるかの選択は日本に課せられた重要課題といえる。



2016年岡崎市親子のワークショップ



2016年越前市親子のワークショップ



2016年越前市ワークショップ参加者集合写真

教育

中国、何でも見てやろう、中国、何でも食べてやろう

きむら まさふみ
木村 正文 (元 伊藤忠商事)

今般、国際理解教育の一貫として、東京都中央区立阪本小学校で「中国」をテーマに講演した。この小学校は1873年（明治6年）に創設された歴史のある学校で、「第一大学区第一中学区第一番官立小学阪本学校」と称され由緒正しい学校である。出身者には谷崎潤一郎も名を連ねている。当日は台風接近で心配したが、無事雨も降らず予定通り講話ができた。体育館に3年生から6年生まで計94人が防災頭巾を座布団代わりにして座り、熱心に耳を傾けてくれた。

当初、「中国」のことをいくら話で聞かせても、興味を示さないのではと思い、題目を「中国、何でも見てやろう、何でも食べてやろう」とし、徹底的にビジュアルに訴えることを考えた。もし集中しなかったら、指名して質問やクイズ形式で参加させることも考えたが、これは杞憂^{きゆう}に終わり、みんな素直でまじめに、時には歓声をあげて反応してくれた。

冒頭、中国に行ったことがある人、あるいは家族・親戚等が中国に行ったことがあるかと聞いたら、10数人が挙手していたので中国に縁がある人も少なからずいることが確認できた。

パワーポイントを使って紹介した内容は下記3点。

①中国の世界遺産のうち、九寨溝、黄龍、敦煌、チベット等を紹介。特にチベットは「ポタラ宮殿」、「五体投地」および青蔵鉄道でゆく標高5,000mの世界には一度は行ってみる価値がある。

②中国の食文化、激辛の四川料理と、何でも食べてしまおう広東料理を紹介した。

③中国伝統芸能の「変面」ビデオを鑑賞。一瞬で顔が変わる驚きと最後素顔になった美女にワイワイガヤガヤと喜んでくれた。

特に食に関して は反応が敏感で、ラーメン、ギョーザ、チャーハン好きの生徒が多いなかで、犬、蛇、ゲンゴロウ、サソリ等を食べることを紹介したところでは大きな驚きや悲鳴の聲が上がり、盛り上がっていた。

阪本小学校は銀座や日本橋のある中央区に位置しており、土地柄外国人と巡り合う機会も多いので、英語と中国語に興味を持ち、外国の友人を作ることを勧めた。また4年後はオリンピックもあり、「お・も・て・な・し」で一番大事なことは「ありがとう」と「笑顔」であることを締め言葉とした。

今回94人の小学生の中に1人中国人がおり、最後にお礼のあいさつで「今日は中国を紹介してもらってうれしかった」と。たどたどしい日本語ではあったが、心温まる思いであった。このような機会を頂き、関係各位に改めて感謝したい。



教育

福岡大学夏季集中講義

ばんの まさのり
坂野 正典 (大学講座担当コーディネーター、元 住友商事)

私は2013年から毎年8月第1週の5日間、福岡大学で夏季集中講義の講師をやっている。なぜ、私が福岡大学の講師となったのか、その経緯を簡単に説明したい。私は2012年2月に会社を辞め、同年10月にABICの大学・EC(エクステンションセンター)講座担当コーディネーター(CN)となった。その直前にABICは福岡大学から、前述の夏季集中講義の講師派遣の依頼を受けていた。当時、ABICの九州地区での講師派遣は、立命館アジア太平洋大学(APU)と長崎県立大学の2校のみだったこともあり、福岡大学の依頼をABICは二つ返事で引き受けた。引き受けたが、問題があった。大学の1科目(2単位)は、1週間1コマ(90分講義1回)を4ヵ月かけ15コマやるのが一般的な構成だが、この集中講義は1日3コマ、5日間で15コマの構成となっていた。通常、ABICが行っている講義は、複数の講師によるオムニバス形式だが、福岡大学の集中講義は、東京～福岡間の交通費と福岡での宿泊代がネックとなり、オムニバス形式は受けられず、結局、一人の講師が15コマ全てを担当する形式となった。このため、ABICで講師選びに頭を悩ませていたところ、タイミング良く(悪く?)CNとなった私が、会社を辞める直前まで商社の総合研究所にいたことで、「知識の引き出しが多そうだ」と誤解し、私を講師に選んだとのことである。

福岡大学は、福岡市の南西、市内中心部より地下鉄で17～18分の所にあり、医学部はじめ9学部31学科、約2万人の学生を擁する、西日本最大の総合私立大学である。

集中講義のテーマは当時の担当教官(商社出身、2015

年退官)と相談し、何とか決めたが、以降、講義資料作成の関連資料や情報収集、整理に追われる日々となった。問題は、講義資料の作成だった。現在、大学ではパワーポイント(PPT)による講義が主流で、ABICの他CNより、PPTによる資料作成を勧められた。PPTの資料作成を勧められたものの、当時の私にはPPTの知識、技術はほとんどなく、関連参考書を頼りに独学で、PPTによる講義資料(スライド)を作成するしか方法はなかった。初めはスライド1枚分の作成に1～2時間かかり、合計600～700枚の講義資料は、講義開始1ヵ月前に完成した。この作業経験のおかげで、今では人並みにPPTを活用できるようになった。

集中講義の受講生は商学部の2・3・4年生が対象で、過去3年間は毎年数人のアジア系留学生が入り、22～23人規模のクラスであった。しかし、8月1日から始まった今年(2016年)の講義は、簡単に単位が取れるとの「うわさ」が広まったせいか、受講生は50人に増えていた。午前9時から昼食を挟み午後2時半まで、学生も私も体力勝負だ。今年も15コマの講義とその後の試験が終わった。8月の福岡は、今年も暑かった。学生の読み(?)通り、受講生全員が及第点を取り、単位取得ができた。講義は「中南米とブラジルから世界を観る」、要は中南米とブラジルを切り口に、「世界のしくみとトレンド」を理解してもらう内容だ。卒業生の9割近くが福岡県内に残るといわれる福大生だが、集中講義で学んだ「世界のしくみとトレンド」を少しでも理解して、卒業後の人生を送ってほしいと願っている。



教壇の筆者

教育

高校生国際交流の集い

日本貿易会と国際社会貢献センター（ABIC）は、青山学院大学、関西学院大学との高大連携プログラム「高校生国際交流の集い」を今年（2016年）も開催した。

この催しは2007年から日本貿易会とABICが青山学院大学ならびに関西学院大学と共催で関東と関西それぞれでスタート、日本と海外の高校生の交流を大学生が中心的役割を担いつつ企画から運営までリード、大学教授、社会人が側面支援を行う産学共同の試みとし、異文化理解を深めることを目的とした高大連携教育の一環として、日本と米州、欧州、アジア・大洋州諸国の高校生が語り合う国際交流の場となっている。

関東は民間国際教育交流団体のAFS日本協会東京支部が、また、関西はAFS日本協会大阪支部、日本国際交流振興会（JFIE）が協力団体として参加した。

関東（7月23日）

震災の影響により中止となった2011年を除き、2007年より青山学院大学で毎年実施されており、今年で9回目を迎えた。今回は、横浜市立横浜商業高等学校から7人、横須賀学院高等学校から6人、神奈川県立相模原高等学校から4人、青山学院横浜英和中学高等学校から5人、青山学院高等部から1人、総勢23人の日本人高校生が参加し、海外の高校留学生9人（豪州、中国、タイ、アルゼンチン、韓国、フランス、デンマーク、フィリピン、米国より各1人）

を交え、総勢32人が参加した。参加者は8人ずつ4班に分かれて、それぞれの班が作成したゲームに挑戦していくことでお互いの距離を縮めていくことができた。これらの活動については、青山学院大学生を中心とした大学生が丁寧に指導し、それぞれの班をうまくサポートして活動を充実させていた。

交流の場は日本語と英語が中心であったが、お互いを理解し合う有意義なイベントであった。

（小中高校国際理解教育コーディネーター にいづま じゅんいち 新妻 純一）



全員を集めてゲームの説明



参加者全員で

関西（7月25-26日）

高校生国際交流の集いは2007年より回を重ね、今回で10回目となった。関西学院大学上ヶ原キャンパスを会場に「Know the world, know yourself」（世界を知ろう、自分を知ろう）というテーマで2日間にわたり開催された。

兵庫県立宝塚西高等学校、兵庫県立国際高等学校、大阪

府立千里高等学校、啓明学院高等学校、関西学院高等部、関西学院千里国際高等部に加え、今年初参加の兵庫県立長田高等学校、兵庫県立兵庫高等学校を加え、8校から計49人の日本人高校生と、米国、カナダ、コスタリカ、メキシコ、コロンビア、アルゼンチン、ブラジル、フランス、ドイツ、フィンランド、チェコ、豪州、ニュージーランド、

中国、タイからの留学生計30人が参加した。参加者数は過去最多の79人となり、この行事を運営する関学学生スタッフも各学部から総勢26人が参画した。

行事初日は、関西学院大学研究推進社会連携機構社会連携センター長、木本教授の開会挨拶で始まり、続いてABIC会員の瀬尾さんが「多文化共生を考える」というテーマについて、分かりやすい英語で、自身の経験を交えユーモアあふれるスピーチを行った。昼食後、体育館でのレクリエーションを通じ、高校生と留学生はすぐに打ち解けた。続いて、8つのグループに分かれ、大学生のリードによりグループごとに決められたサブテーマにつきディスカッションを開始した。夕食後は、関学の宿泊施設に移動し、交流を続けた。

2日目も、グループディスカッションを続け、まとめた

結果を全員で表現方法を工夫しながら、楽しくプレゼンテーションを行った。全グループが発表した後、留学生の代表が大学生に対し2日間にわたるリードに対する感謝の意を述べる場面があった。参加高校からの教諭、留学生を本行事に派遣いただいた機関からの来賓に、ABICも加わり審査の結果、優秀賞および準優秀賞グループを選定し、ABIC山口事務局長より表彰状を授与した。次いで木本教授より全参加者に修了証が授与された。山口事務局長による閉会挨拶の後、参加者全員が名残を惜しみ、家路に就いた。

これからも関係者の意見を取り入れつつ、高校生にとって、また彼らをリードする大学生にとってより実りある行事となるようにしたい。

(関西デスクコーディネーター 橘 弘志^{たちばな ひろし})



プレゼンテーション風景



参加者全員で

事務局だより

ABIC会員懇親会を開催

2016年9月23日(金) 18時—19時半、ヒルトン東京お台場 地中海料理「オーシャン ダイニング」において会員懇親会を開催しました。正会員、活動会員ならびに日本貿易会関係者など約120人の参加を得て、小林会長の開会あいさつに続き、齊藤理事長の活動報告および乾杯発声の後、活発な交流、懇親が行われ、盛会のうちに終了しました。



小林会長開会あいさつ



齊藤理事長乾杯発声

留学生支援

東京国際交流館での活動

2016年国際交流フェスティバル

8月13日（土）にABICの留学生支援活動の拠点の1つであるお台場の東京国際交流館で国際交流フェスティバルが開催された。当日は4,000人以上が来場し、昨年（2015年）より500人少なかったが一昨年（2014年）を400人上回る来場者数であった。会場では各国の自慢料理の屋台、福島物産品販売、E7系ミニ新幹線かがやきの試乗、ビニール製プールの中で遊ぶパドラーボート、サイエンス教室、国際のど自慢大会など盛りだくさんのプログラムが続いた。

ABICは文化教室講師による茶道、華道、書道の体験教室と着付け指導を行い、500人を超える参加者に日本の伝統美に触れる機会を提供した。またボランティアの方々には朝9時から夕刻までの長時間を会場準備、展示、指導、後片付けにご協力いただいた。

夕暮れとともに始まったのは恒例の盆踊りで、江東区民の皆さんのご指導のもとに留学生とその家族、近隣住民の方々、ABIC会員などが日本の夏の夜のひと時を楽しんだ。



秋の新入館生歓迎バザー

11月5日（土）および6日（日）の両日にわたり第30回バザーが東京国際交流館で行われた。5日は少し肌寒い陽気であったが、開始時間の30分前から40人ほどの館内生が楽しそうに話しながら列を作り並んでいた。

当日は台所用品、調理器具、食器類に人気があり、特に日本の伝統工芸である陶磁器をまとめて買う人が多かった。今回もABIC会員および支援企業とその社員、ならびに日本貿易会の役職員の方々から140箱の貴重な品物を寄贈いただき、売上高は26万円になり、過去4回のバザー

の中で最高の金額となった。バザー売上金は従来同様に同館の留学生支援活動に提供させていただいた。ご支援いただいた皆さまには厚く感謝申し上げたい。

なお、例年のように会場内にABICコーナーを設け日本語広場の講師とコーディネーター6人が待機し、ABICの活動状況の説明や提供している各種講座の勧誘を行った。休日にもかかわらずご協力いただいた講師の方々にお礼を申し上げます。

（留学生支援担当コーディネーター）



兵庫国際交流会館での活動

文化・日本語教室活動

2015年6月からスタートした留学生を対象としたABIC文化教室（空手、華道、書道）は、2016年10月の時点で延べ参加者数は170人となっている。内訳は、空手69人、華道53人、書道48人。兵庫国際交流会館には9、10月で新たに50人が入館し、34カ国から約185人の留学生が寄宿し、神戸市を中心に関西の17の大学に通っている。異文化への旺盛な探究心から積極的に各教室に参加している。オリンピック種目入りした空手は、女子も含め従来は4—5人程度であったのが、直近ではアフリカからの学生を中心に急増し、道着が足りないほどになっている。華道では、中国からの受講者一人に対して10回受講した修了証が授与された。本人は中国へ帰国しても華道を続け、現地の人々に教えたいとのことである。書道の受講者は平均2—3人であるが、10月には、非漢字圏のバングラデシュからの学生が参加し、全く初めてであったが、「花鳥風月」をうまく書くことができた。中国からの学生にとり、書道は学校では必修科目ではなく、当初は戸惑っていたがすぐに慣れていった。今回親族が著名な書道家である受講者が参加し、熱心に練習をしていた。

一方、2015年5月開講の日本語教室は、延べ参加者数は1,552人を超え、とりわけ10月は

176人と過去最高を記録した。ABEイニシアティブに基づく多くのアフリカからの学士が、ICTを学ぶため神戸情報大学院大学に入学しているが、彼らは日本語を必要としないことから全くの初心者である。初級クラスにはこれらの学生が積極的に参加し賑わっている。日常生活で少しでも日本語が話せることはそれだけ日本人との交流の幅が広がるので、継続して参加することが望まれる。上級クラスでは、就活を目指す学生にとり有意義なテーマを用意して少しでも役立つようにしている。



秋の新入館生歓迎バザー

10月14日（金）の新入館生ウエルカムパーティーに続き、10月22日（土）に歓迎バザーが開催された。これで5回目の開催になるが、秋の新入館生50人をはじめ、既入館生と一部外部からの来場者を加え約180人がバザーに参加した。今回もABIC会員および支援企業とその社員、ならびに日本貿易会の役職員等の方々から65箱を超える広範囲な品物を、関西地区のみならず関東地区からも寄贈いただき、5万4,000円の売り上げを得ることができた。この売上代金は、留学生支援活動資金として同館に提供させていただいた。ご支援くださった皆さまには厚く感謝申し上げます。

今秋、兵庫国際交流会館には、ABEイニシアティブに基づくマリ、南スーダン、南アフリカ、モロッコ、エチオピア、ナミビア、セネガル等のアフリカ諸国からの留学生に加え、カンボジア、フィリピン、パキスタン、中国、台湾等アジア諸国からも

入館している。日本に来て間もない学生にとり、初めての冬を控え皆さまから提供された生活必需品は、極めて安価で販売され払底するほど好評であった。同館の関係者からは次回も是非開催してほしいとの要望があった。バザーには、ABIC関西デスクに加え、日本語講師も参加し入館者との交流も行った。ABIC関西デスクでは、関係者の協力を得てバザー、日本語教室および文化教室以外でも、さらに広範囲な学生支援活動を目指しており、関西在住の会員の皆さま、お知り合いの方々には引き続きご支援、ご協力をお願いしたい。（関西デスクコーディネーター）



会員の種類

種類	内容	年会費	
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体	1口 50,000円
		個人	1口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、並びに個人、法人及び団体。	法人及び団体	1口 10,000円
		個人	1口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要	— —

正会員

団体・法人（17社）〈社名五十音順〉

〈10口〉 (一社)日本貿易会 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株)
 〈4口〉 (株)日立ハイテクノロジーズ 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 阪和興業(株)
 〈1口〉 兼松(株) 興和(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

個人（11名）〈入会順・敬称略〉

池上 久雄 寺島 実郎 小島 順彦 宮原 賢次 吉田 靖男 岡 素之
 佐々木 幹夫 勝俣 宣夫〈3口〉 小林 栄三 槍田 松瑩〈3口〉 市村 泰男

賛助会員

法人（4社）〈社名五十音順〉

(有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ (一社)国際行政書士機構 NPO法人賛否両論〈3口〉

個人（404名）

下記は2016年6月以降にお申し込み頂いた方です。ご協力を深謝申し上げます。(敬称略・氏名五十音順)

〈2口〉 笹倉 優
 〈1口〉 加古 良二 柴崎 敏男 鈴木 高裕 増井 哲治 山中 健司

活動会員 2,715名

(2016年10月末現在)

賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員及びその他の個人の方、並びに法人及び団体の皆様のご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル23F

TEL : 03-3435-5973 FAX : 03-3435-5970 E-mail : mail@abic.or.jp